

第10回目 第7章 (p.179~195) 元祖アナバプテストの顔ぶれ 2015年1月10日(土)

◎再洗礼派が拡大した背景に、何千もの「普通の」信者あり。(信仰の生き方と果敢な証し)

◎「殉教者の鑑」に登場する殉教者の物語。名もない大勢の人たちの活躍。

北ドイツとオランダの再洗礼派

*神秘的で謎めいた指導者——メルヒオール・ホフマン

- ・当初、ルター派に同調。ルターにも会ったことがあるが、反教権主義と社会正義の訴えにより、ルター派と不和に。
- ・ストラズブルにて改革者、キリスト教神秘主義者、幾つかの異なる再洗礼派と交流。雑多な要素を混合して独自の神学を構築、自分の一派を形成。
- ・神秘的、黙示的、革命的、そして低い度合いで聖書的な強調点を組あわせ、大衆をひきつけた。(メルヒオール派再洗礼派)
- ・1533年に投獄された。ストラズブルに新エルサレムが樹立されるという思い込み。彼の投獄後、指導者不在→2年後大惨事発生(ミュンスター事件)

*オランダのパン職人——ヤン・マティアス

- ・神からの啓示があったと言って、メルヒオール派を指揮。12人の使徒を派遣。彼らはミュンスターで大歓迎を受けた。マティアスは、新エルサレムはストラズブルではなくミュンスターだと確信。
- ・各地の再洗礼派に、ミュンスターで新エルサレムの市民になろうと呼びかけた。
- ・町を封鎖され、兵糧攻めに遭い、強行突破を企てるも失敗。マティアスの死。

*仕立て屋の若者——ヤン・ファン・ライデン

- ・ダビデの血統の王であると名乗り出て、マティアス後の指揮を執った。
- ・神学者ベルンハルト・ロートマンの支持を受け、暴力的改革を実行。旧約聖書をその権威として、一夫多妻を導入、軽い罪にも死刑を執行、新エルサレムの到来を待った。
- ・ミュンスター陥落。中にいた人々は虐殺された。

◎ミュンスター事件が与えた歴史的影響

*ヨーロッパ中で迫害が激化。

*ほとんどの再洗礼派の人々は、ミュンスター事件を非難したものの、これを再洗礼派の代表として批評した人々は、再洗礼派をキリスト教の歴史の片隅に追いやった。また、再洗礼派にとっても、ミュンスター事件を自分たちの歴史から排除するわけにはいかない。

◎ミュンスター事件後の、ネーデルラントにおける再洗礼派(メノナイトの誕生)

*元カトリック司祭——メノ・シモンズ(1536年、再洗礼派に参加)

- ・各地で離散状態にあった再洗礼派共同体を訪れ、教育と牧会に専念。再洗礼派を一つの

運動へと統合。

- ・彼の多数の著作と忍耐強い働きによって、再洗礼派は生き延びて栄えた。

- * オッベ・フィリップスとディルク・フィリップス兄弟（ホフマンから洗礼を受けた）

- ・オッベはメノに洗礼を受けた。彼はその後運動から手を引いた。

- ・ディルクはメノの同僚として、牧会指導力を発揮、多数の文献を残す。

- * レーナエルト・バウエンス（1556年にメノから按手を受けた）

- ・第二世代を代表する人物。一万人以上に洗礼を受けた。16世紀後半に活躍。

◎オランダ系メノナイトの黄金時代

多くの人材を輩出。アントワープ、フランダース地方でも栄えたが、やがて迫害によって、各地に移住。ウクライナ→ロシア→アメリカへ

進展する運動

- * 三つの流れ（スイス、南ドイツとオーストリア、北ドイツとオランダ）互いに交流。

- * 1550年代には、神秘的、黙示的、革命的要素の強いグループは主流から外れた。

- * フッターライト共同体の形成（財産共同体）

- * アーミッシュ

- * メノナイト

- * ハロルド・S・ベンダー（1944年に「アナバプテスト・ビジョン」を発表・

- ・弟子道、兄弟愛（共同体）、無抵抗主義（アナバプテスト・ビジョンの中核概念）

- * C・アーノルド・スナイダーによる「アナバプテストの歴史と神学」

◎アナバプテストが共有する信念

- ・キリスト者は、その代償がなんであれ、イエスの模範になり、その教えに従う。

- ・倫理と教会の問題、そして神学における権威は、聖書にある。

- ・教会と国家はどちらも神によって立てられているが、両者は分離されなければならない。

- ・各教会は洗礼を受けた弟子たちの共同体であって、皆が互いに対して、また互いのために、信仰の成長と訓練の義務と責任を負っている。

- ・教会戒規（「破門の実施」を含む）は、教会の純潔と特殊性を保つために重要である。

- ・イエスに従う者は、進んで私財を相互に分かち合う。

- ・非暴力と真実を語ることは弟子道の本質的な側面であり、よってキリスト者は戦闘参加や宣誓を行うべきではない。

- ・苦難は信仰深い弟子たちにとって当然予測すべきことであり、本物の教会のしるしである。

以上のすべてを、初期の再洗礼派が満場一致で支持したわけではない。多様性があった。しかし、迫害する側は十把一からげで迫害した。再洗礼派への恐れはイングランドにも及び、再洗礼派というだけで神学的に怪しいとか、様々な理由で糾弾された。

今日のアナバプテストたち

◎ 4つの共同体に大別される

- (1)メノナイト、アーミッシュ、フッタライト——初代再洗礼派の末裔
- (2)種々のブレザレン兄弟団、ブルーダーホフ運動、いくつかのバプテスト派——後の時代に形成され、他教団でありながら、再洗礼派思想の感化を受けた。
- (3)新しいアナバプテストの教会——世界各国でメノナイトやブレザレン系の宣教活動によって始まった。
- (4)ネオ・アナバプテスト——ほかの伝統に属しつつ、再洗礼派の思想の影響のもとにある。

アーミッシュとフッタライト

*独自の生活スタイル。財産共同体。

- ・生活を聖と俗に分けない。
- ・職業に対する考え方——ある種の商取引や職業は弟子道に反するものとして避ける。
(戦争関連の職種、人間の虚栄心を満たすための仕事、虚業など)
- ・新技術を受け容れるにあたっての用心深さ。
- ・「くじを引く」ことによって指導者を決める。(人間の限界を知り、神に委ねる)
- ・フッタライトによる財産共有の慣習(現代社会への問題の提起)
- ・様々な困難、人間的弱さにもかかわらず、非暴力に徹している。

メノナイト

◎現実にはさまざまな問題を抱えながらも、そこに見られる特徴

- *謙遜、穏やかさ、平和的姿勢、シンプルライフの実践——アナバプテストの核となる価値を具体化。
- *慎重な歴史研究と自らの物語を優れた構想で語ることで、中傷と軽視から再洗礼派の伝統を回復。
- *伝統としてのもてなし。
- *人命を奪う暴力に反対する断固たる証し(戦争、死刑、他)
- *平和づくりのスキルを磨き、抑圧や不和に代わる現実的対処法を提供している。
- *信仰を「生きる」ことで、実践的弟子道への献身を目に見える形で示している。